第２節　雁屋遺跡における弥生時代拠点集落の変遷

１．はじめに

ここまで報告してきたように、雁屋遺跡の調査では弥生時代前期中頃の集落を検出した。ここではその成果をこれまでの調査成果の中に位置づけ、これまでの調査成果全体を俯瞰したうえで、今回の調査成果および雁屋遺跡自体の意義について検討しておきたい。

２．雁屋遺跡についての研究史と問題の所在

雁屋遺跡について、もう一度簡単に概要を述べておきたい。遺跡は、大阪府四條畷市雁屋北町から江瀬美町・美田町にかけて所在し、府立四條畷高等学校を中心にして東西約 800m、南北約 500mの広さが、弥生時代、古墳時代、中世の集落遺跡などとして周知されている。その地勢は生駒山系の西側へ広がる沖積地で、旧大和川水系や寝屋川水系の大小河川による土砂によって形成されたものである。

雁屋遺跡はこれまでに多くの発掘調査が行われており、遺跡は弥生時代前期から後期まで続き、この地域の拠点的な集落と考えられている。遺跡の発見は 1983 年で、同年の発掘調査で弥生時代前期の資料が出土した（野島 1984）。注目されたのは 1985 年度の調査で、中期の方形周溝墓４基を検出し、合計 20 基の組合式木棺がみつかった（野島 1987a）。その後も府立四條畷高等学校内での調査や（辻本 1987、阿部 1999 など）、府立四條畷保健所建て替えに伴う調査（野島 1994）などで、相次いで中期から後期にかけての方形周溝墓群や竪穴建物群が検出されるに及び、遺跡は弥生時代全時期にわたる拠点集落と評価されるようになった。

調査報告以外で雁屋遺跡の評価が行われた主な論考としては、初期のものとして瀬川芳則によるものがあり、河内潟北畔における大集落とされた（瀬川 1991）。塩山則之は弥生時代全時期にわたる集落と評価し、中期から後期にかけて付近一帯に大規模な方形周溝墓群があったと述べた（塩山 1995）。三好孝一は河内湖周辺部における弥生時代集落について述べる中で、雁屋遺跡を生駒山西麓における中核的集落の一つと位置付けた（三好 1999）。濱田延充は北河内地域の弥生集落の動態を述べる中で、３つの基礎地域のうち生駒西麓に属する遺跡として取り上げ、前期から後期に継続した集落として紹介した（濱田 2001）。山田隆一は既往の 1992 年度調査において大型掘立柱建物柱建物が検出されている可能性を指摘し、前期から後期までの遺構の変遷を詳述した（山田 2002）。若林邦彦は一連の研究の中で大阪平野の主要弥生集落の一つとして取り上げた（若林 1999、2001、2009）。若林は弥生時代の大規模集落を、複数の居住域（基礎集団）の複合体から成ると述べ、その複合体を「複合型集落」と呼称した（若林 2001）。そして、雁屋遺跡をこの複合型集落として位置づけた（若林 2009）。

このように、雁屋遺跡は拠点的な集落のひとつとして位置づけられてきているが、遺跡の変遷についての検討としては、野島稔がこれまでの調査成果を詳細にまとめたものと（四條畷市史編さん委員会 2016）、阿部幸一による報告書内での検討があり（阿部 1999）、さらに、調査成果全体を俯瞰し、詳しくまとめて述べたものとして、山田隆一の研究がある（山田 2002）。しかし、これらの研究以降も雁屋遺跡では多くの調査を行ってきており、新たな集落域等を検出してきている。そこで、ここではこれまでの調査成果全体を俯瞰し、居住域や墓域の具体的な変遷について時期別に検討することで、集落の変遷および遺跡の評価について、あらためて考察することとしたい。

なお、各遺構の時期については、今回は基本的に各調査報告に依拠することとする。近年の土器編年に詳細に照らし合わせたうえでの検討は後日に期すこととしたい。

３．雁屋遺跡におけるこれまでの弥生時代集落調査とその成果

《四條畷市教育委員会による発掘調査》

遺跡は 1983 年２月に旧日本道路公団の職員住宅建設工事に伴う試掘調査によって発見した。1983 年度（昭和 58 年度）に同工事に伴う発掘調査を行い、地表下約 2.5mにおいて幅約 0.4mの溝を検出し、弥生時代前期の大型壺・壺・甕、磨製の石庖丁・太型蛤刃石斧・柱状片刃石斧・土製紡錘車などが出土した（野島 1984）。また、中期の土器棺墓を検出した。

1985 年度には、病院建設工事に伴う発掘調査で、弥生時代後期の旧河川・周溝墓・竪穴建物・土

壙、中期の方形周溝墓４基を検出した（野島 1987a）。後期の周溝墓は大きく削平を受けており、主体部に関しては痕跡を残すのみであったが、周溝内からは在地の土器とともに丹後系の台付鉢や甕、近江系の鉢、出雲・山陰系の低脚坏や土玉が出土した。また竪穴建物からは丹後系の把手付鉢が出土した（三好ほか 2007）。これらのことから、弥生後期の雁屋遺跡は日本海側地域との交流があったものと考えられる。中期の方形周溝墓については、第１号方形周溝墓と第２号方形周溝墓内から子ども用のものを含めて合計 20 基の組合式木棺を検出した（野島 1987a）。棺材の樹種鑑定から高野槇・ヒノキ・カヤ材が使用されていたことが判明し、特に高野槇の木棺は遺存状態が良好なものが多くみられた。また第１号方形周溝墓２号主体部では、高野槇の底板上の腹部から腰部にあたるところからサヌカイト製の打製石鏃が 11 点出土した。第１号方形周溝墓と第２号方形周溝墓の共有する周溝内から出土した壺３点・把手付鉢・水差形土器の５点には水銀朱が塗られていた。塗布された部分が土器の一部の面であることから、土器の正面を意識した可能性がある。また同じ周溝からは蓋付木製四脚容器が出土した。容器は、ヤマグワ材を４本の脚が付く隅丸方形に刳りぬいて作成しており、口縁部の左右にはそれぞれ２個の孔を開けた突出した耳が付いていた。蓋の上面には双頭渦文が浮き彫りされており、左右にはそれぞれ２個の孔を開けた突出した耳が付き、容器と蓋を紐で固定できる状態で、この蓋にも水銀朱が塗られていた。

1990 年度には病院増築に伴い 1985 年度調査地の北隣を調査し、弥生時代後期の溝、中期の溝等を検出した。方形周溝墓群が続いているものとみられる。

1992 年度と 1994 年に、府立四條畷保健所の建替え工事に伴い発掘調査を行った（野島 1994）。調査の結果、中期の竪穴建物や方形周溝墓、後期の竪穴建物などを検出した。第１号方形周溝墓の西側周溝内からは、長さ約 1.4mで断面Ｕ字状の隅丸長方形をしたモミ材の板状木製品とともに、ノグルミ製の鳥形木製品が出土した。火災を受けた中期の竪穴建物からは分銅形土製品や炉跡から卜骨とみられる肩甲骨が出土した。また土坑からは木製盤・杓子など未成品のものが多く出土しており、未成品の貯蔵施設と考える。石製品としては特筆すべきものとして、銅鐸の舌が２本出土した。

1996 年度には 1983 年度調査地の 50m東で公的住宅建設に伴い調査を行い、弥生時代中期の方形周溝墓を４基検出した。

1998 年度にはマンション建設に伴い調査を行い、弥生時代の集落を検出した。

2001 年度からは都市計画道路雁屋畑線建設に伴う一連の調査を開始し、2001 年度と 2011 年度の調査では、弥生時代前期の集落を検出した（本書）。

2010 年度第１次の宅地造成に伴う調査では、弥生時代中期から後期にかけての４面の遺構面を検出し、掘立柱建物を構成すると考えられる中期の柱が２基出土したほか、同時期の木製品の貯蔵施設と、それを囲むように区画する杭列を検出した（村上・實盛 2011）。遺物としては播磨地域の特徴を示す土器が出土しており、中期から他地域との交流があったことを示している。

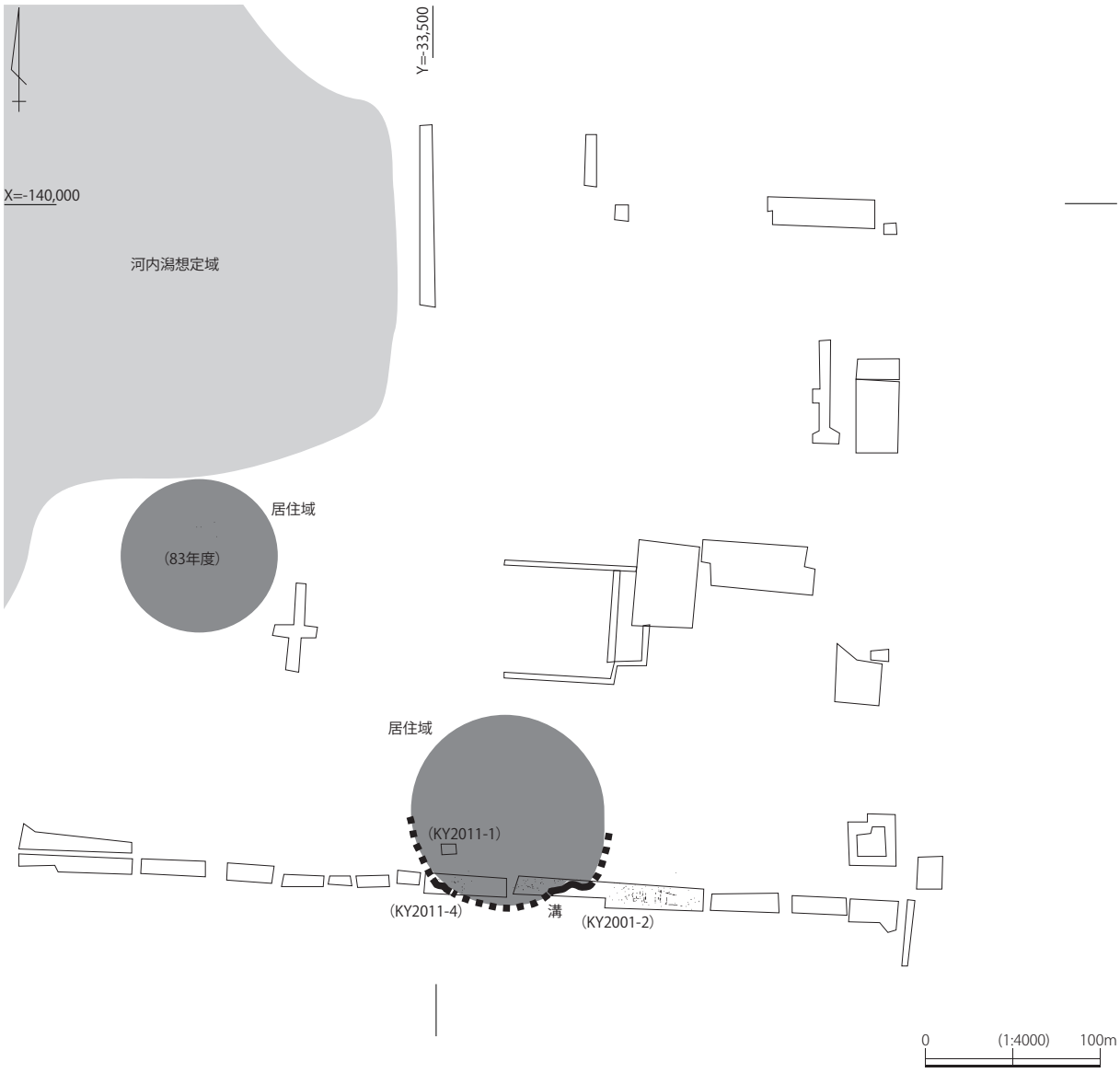
2011 年度のグループホーム建設に伴う第１次調査では弥生時代前期の耕作地遺構を検出した（本書）。宅地造成に伴う第２次調査では中期の集落においてサヌカイト埋納土坑を検出した。2013 年度には民間店舗建設に伴い調査を行い、弥生後期～古墳初頭の方形周溝墓の可能性がある溝を検出した（本書）。

2018 年度には宅地造成に伴い 1985 年度調査地の西隣で調査を行い、弥生時代中期と後期の２面の遺構面を検出した。後期の遺構からは革袋形土器などが出土した。中期の遺構面では方形周溝墓群と集落跡を検出し、墓域と居住域との境が盛土により構築された堤防を伴う溝で区画されているのを確認した。

《大阪府教育委員会による発掘調査》

1986 年度に府立四條畷高等学校東館建設工事及び汚水排水管敷設工事に伴い発掘調査が行われた（辻本 1987）。調査の結果、後期の河川・大溝や中期の方形周溝墓３基・土壙２基・溝・大溝などが検出された。第１号方形周溝墓の周溝内からは第Ⅲ様式新～第Ⅳ様式の遺物がまとまって出土しており、土器焼成後に穿孔されているものが多くあった。

1993 年度に府立四條畷高等学校内排水管切替工事に伴う発掘調査が行われた。調査の結果、後期の溝などが検出された（酒井 1994）。



第71図　弥生時代前期（Ⅰ様式期）の雁屋遺跡

1995 年度に府立四條畷高等学校体育館建替えに伴う発掘調査が行われた（佐久間 1995、大阪府教育庁文化財保護課保存管理グループ 2017）。調査の結果、後期の竪穴建物 10 棟、溝、土坑などの遺構とシャーマンを線刻した土器などが出土した。

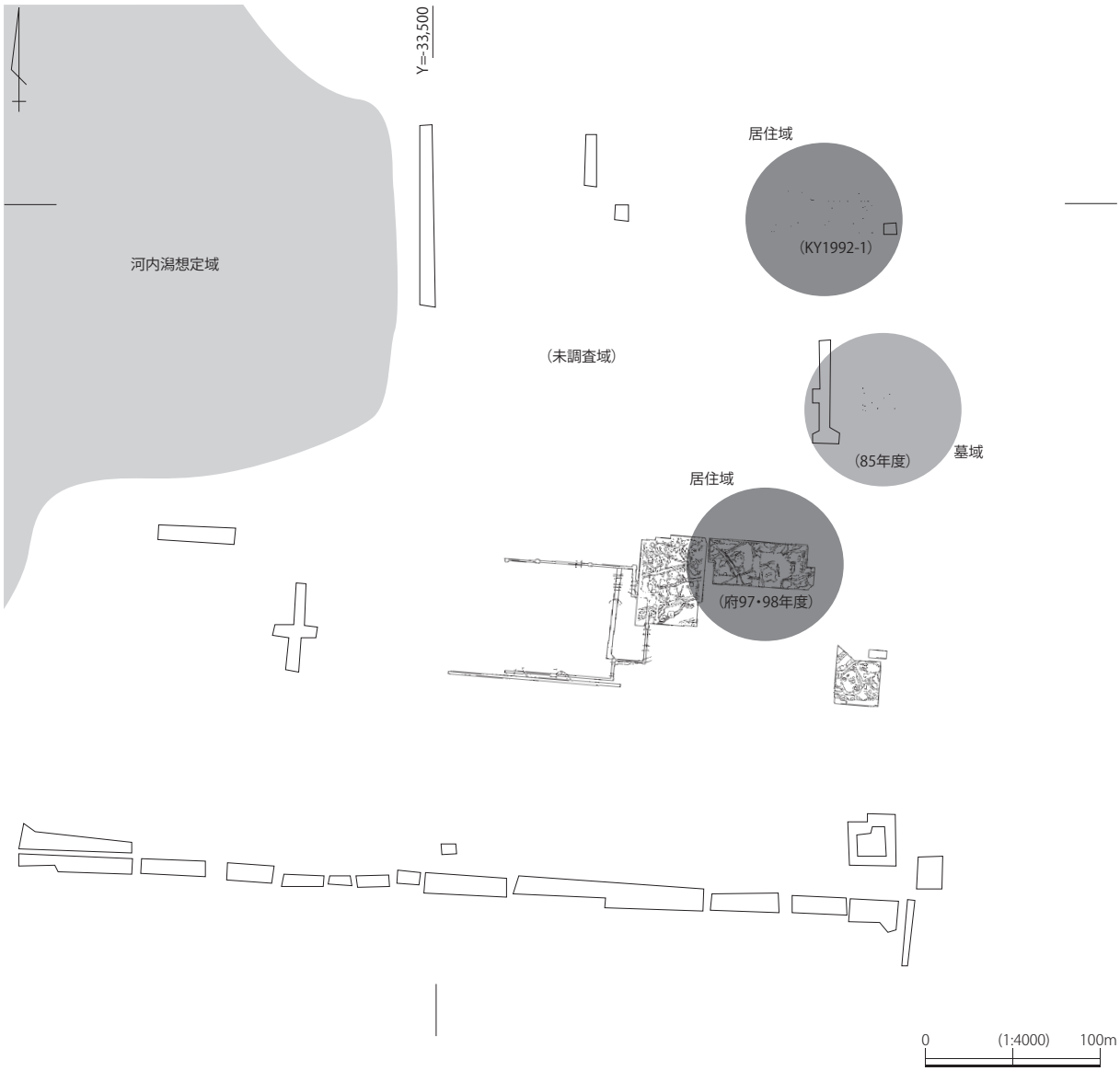
1997 年度～1998 年度には府立四條畷高等学校校舎建替えに伴う発掘調査が行われた（阿部 1999）。中期の方形周溝墓２基と後期の竪穴建物１棟などが検出され、中期の鳥形木製品などが出土した。

2001 年度には 1986 年度の汚水排水管敷設地の南側で調査が行われ、弥生時代の自然河川が検出された（井西 2003）。

2004 年度には防火水槽設置に伴い、1986 年度調査の東館建設地の北側で調査が行われ、弥生後期の溝が検出された（岡田 2006）。

４．雁屋遺跡の集落復元（１）弥生時代前期

弥生時代前期の集落は、遺跡の南西側を中心に展開している（第 71 図）。現時点では集落は２箇所に分かれて分布している。ひとつは遺跡発見の契機となった 1983 年度調査箇所を中心としたもので、ここでは幅 0.4mの細い溝状の遺構が検出された。この溝上面から板付Ⅱ式併行期の大型壺が出土し



第72図　弥生時代中期前葉（Ⅱ様式期）の雁屋遺跡

ている（野島 1984）。時期は弥生時代前期中頃を中心とする。

もうひとつは今回報告した 2001-2 次および 2011-4 次調査地区を中心としたもので、弥生時代前期中頃にまとまりをもつ溝および遺構群を検出した。それぞれの集団の直径は、今回報告における集落が溝（2001-2 次溝 18、2011-4 次溝 14）で区切られる状況から類推でき、大きくても 100mほどとみられる。集落の規模としてはこのころはまだ大きなまとまりをもつには至らず、割合小規模な集団が散在している状況であろう。この居住域を区画する溝は底部が緩やかにＶ字状に窪み、その部分には粘質土が堆積しており水性堆積も想定できる状況であった（2001-2 次溝 18）。今後の調査の進展によっては、この溝を環壕として認識できる可能性があるだろう。遺物をみると他地域系の土器が一定程度出土しており、石器石材も香川県産の可能性がある資料が含まれることから、他地域との交流もすでにこの時点から積極的に行っているとみてよいであろう。これらのことから、集団自体は大規模化していないものの、近隣地域の拠点的な機能を有していた可能性は十分に考えられる。

なお、前期後葉の遺構は現時点では顕著なものを検出しておらず、小断絶がある可能性がある。ただし、一時的に集団が周辺へ移動していたか、もしくは遺跡の調査が進んでおらず集落が未発見である可能性も考慮すべきであろう。

５．雁屋遺跡の集落復元（２）弥生時代中期前葉

弥生時代中期前葉の集落は、おもに遺跡の東側に集落が展開する（第 72 図）。この時期は大阪府の 1997・98 年度調査で方形周溝墓下層から検出された中期初頭の遺構を嚆矢に遺構が形成される。また、1992 年度調査でもこの時期に遡る遺構群を検出している。さらに、四條畷市の 1985 年度調査では中期初頭から方形周溝墓が造営されることを確認しており、初期の墓域の中心域であろう。

この段階での集落は、これらの遺構群を検出した地域に限定されているようであり、居住域は散在している状況とみられ、前段階の集落状況から大きく発展している状況ではない。しかし墓域と居住域双方が明確に存在しはじめるとみられ、その後の発展の基礎が築かれるといえるだろう。

６．雁屋遺跡の集落復元（３）弥生時代中期中葉

弥生時代中期中葉の集落は、遺跡の全体に集落が拡大する発展期である（第 73 図）。この時期は 1992、1994 年度調査で、竪穴建物群を検出しており、この付近に明確な集落域が存在する。墓域は 1985 年度調査と、隣接する 1990 年度調査、大阪府の 1986 年度調査および 1997・98 年度調査で方形周溝墓群を検出しており、一連の方形周溝墓群を形成するものとみられる。また、1983 年度調査で同時期の土器棺墓を検出し、周辺では 1996 年度調査でも方形周溝墓群を確認していることから、墓域は遺跡西部にも存在するものとみられる。

前段階に集落域であった 1997・98 年度調査地は居住域から墓域に変更されて、新たに北側の 1992、1994 年度調査地に居住域が設けられている。墓域の拡大の必要が生じ、居住域を北側の微高地に変更したうえで墓域を南へと拡大した可能性がある。墓域と居住域をあわせた集落域は東西約 420m、南北約 300mに拡大しており、今後の調査によってはさらに広がる可能性がある。

この時期、周辺でも中期中葉に鎌田遺跡（野島 1994b）、同じく中期中葉に中野遺跡（村上・實盛 2018）に方形周溝墓群が営まれる。これらの遺構も、雁屋遺跡の集落との関連で捉えるべきであり、今後の調査の進展によっては、一連の遺跡群として評価すべき資料であろう。仮にこれらを一連の集落として捉えられるなら、中心に居住域が存在し、その周囲に環状に墓域が展開している可能性がある。

７．雁屋遺跡の集落復元（４）弥生時代中期後葉

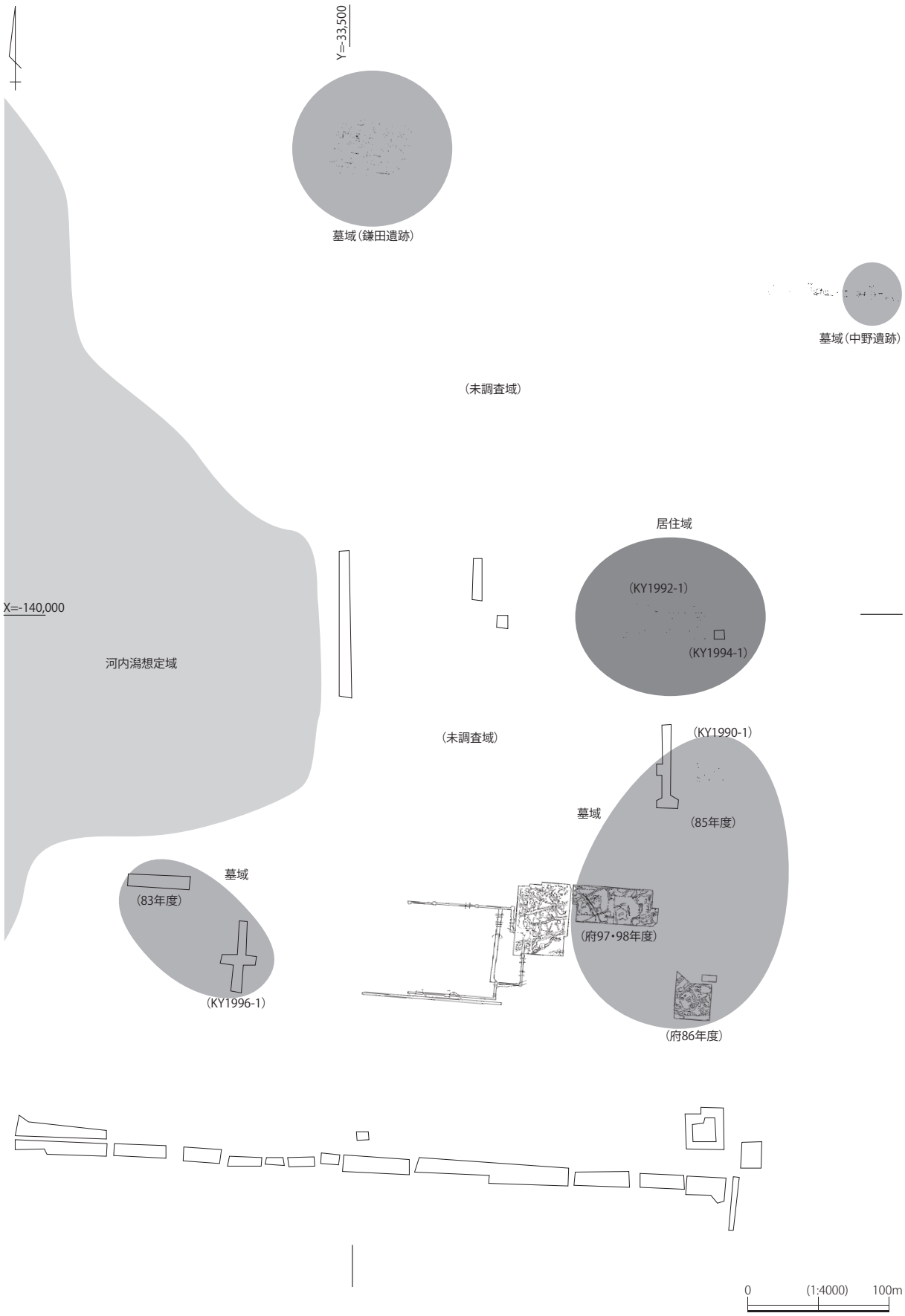
弥生時代中期後葉の集落は、前段階の繁栄が継続する（第 74 図）。この時期に属する居住域は 1992 年度調査を皮切りに 1998 年度、2010-1 次、2011-2 次、2018-1 次調査で確認しており、遺跡北方に広く展開するものとみられる。1992 年度調査では大型掘立柱建物の存在が指摘されており（山田 2002）、中心域となる可能性がある。墓域は 1985 年度・1990-1 次調査を筆頭に、2018-1 次、大阪府の 1986 年度、1997・98 年度調査で検出しており、ほぼ前段階の墓域が継続する。前段階に存在した西側の墓域については未整理のため、今後の整理によっては西側の墓域もこの段階まで存在する可能性がある。注目すべきは 2018-1 次調査で検出した区画溝で、溝の両岸を盛土により堤防状に構築しており、墓域と居住域を区画する意図が明らかである。

この段階は前段階のように広域の遺跡群が想定できるわけではないが、居住域が河内潟沿岸地域まで拡大しており、集住傾向はむしろ高くなっているといえる。特に 1992 年度調査で指摘される大型掘立柱建物は、特殊な施設としての機能を想定することが可能であり、雁屋遺跡の拠点的性格を物語る資料であろう。

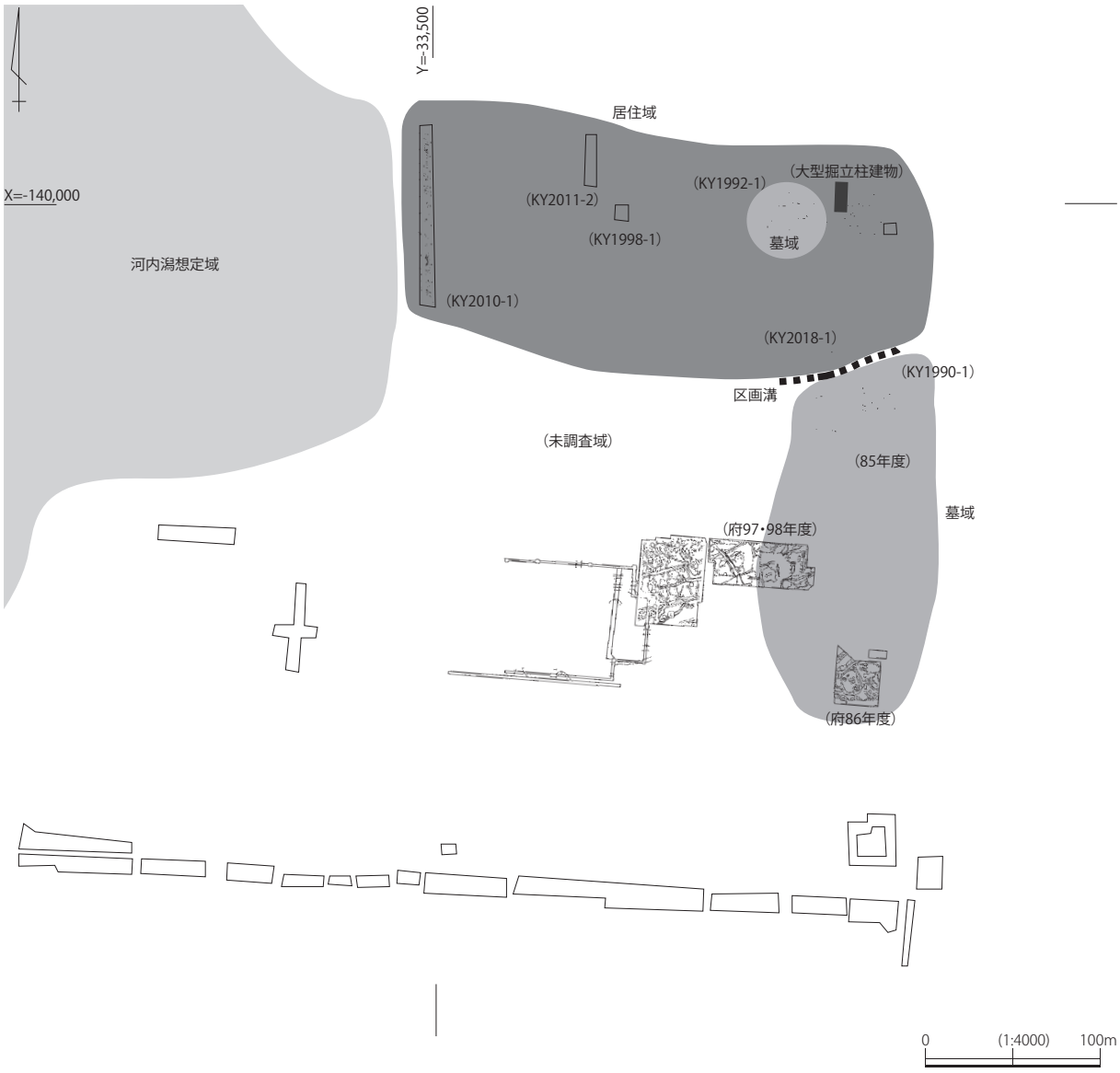
この建物廃絶後に中期後葉でも末の一時期に隣接地が居住域から墓域に変更されている。この墓域が居住域の中に存在するのか、居住域が実は複数ありその間に墓域が存在することになるのかについては、現時点では不明と言わざるを得ない。今後の調査により明らかにできると考える。

８．雁屋遺跡の集落復元（５）弥生時代後期

弥生時代後期も、雁屋遺跡の集落では引き続き前段階の繁栄が継続する（第 75 図）。居住域が検出されたのは四條畷市調査の 1985 年度、2010-1 次、2011-2 次、2018-1 次、大阪府調査の 1986 年度、1995 年度、1997・98 年度調査地などで、遺跡中心の広範囲に及んでいる。1985 年度調査では北近畿や山陰系の土器も出土しており、広範囲に交流を行っていた状況が読み取れる。また墓域は四條畷市



第73図　弥生時代中期中葉（Ⅲ様式期）の雁屋遺跡



第74図　弥生時代中期後葉（Ⅳ様式期）の雁屋遺跡

1985 年度、2013-1 次調査で検出しており、位置関係からみると居住域の周縁部に散在して分布している可能性がある。この時期で注目すべきは大阪府の 1993 年度・1995 年度・1997・1998 年度調査地で検出された同一方向の溝群である。これらの溝群はいずれもおおよそ緩やかに北東方向から西へと流れるものであり、それが２～３条以上同一方向に並行して掘削されている。この溝群より北側は居住域が分布するが、南側はいずれの調査地でも居住域を検出しておらず、2013-1 次調査の墓域が存在するのみである。以上のことから、これらの溝群は、居住域を区画する機能を有した可能性が考えられる[1]。面的な調査がいまだ不足しており、これらを環壕と断定することは現時点ではできないが、少なくとも集落の南限はこの溝群により区画されている可能性が高いといえるだろう。

なお、この時期の雁屋遺跡が完全な環濠集落であるかどうかを類推する資料としては、1985 年度調査地で竪穴建物と周溝墓とが、東西方向の溝と旧河川に区切られた微高地において周溝以外に南北方向の区画溝をもつことなく存在している状況が示唆的である。これが集落縁辺部の状況を示している可能性もあろうが、仮にこの調査地より東側で東西方向の区画溝がみつかれば、雁屋遺跡は環濠集落である可能性が高くなるといえるだろう。しかし現時点では、環濠集落である可能性は積極的には評価できない。

第75図　弥生時代後期（Ⅴ様式期）の雁屋遺跡

この弥生時代後期まで雁屋遺跡の繁栄は継続するが、2001-2 次調査で検出した庄内式期前半期の遺構を最後に遺跡は断絶し、その後は流路等から少数の遺物が出土するのみとなる。代わって庄内式期には、遺跡北方約 1.5km の位置にある寝屋川市小路遺跡が、この地域の拠点的集落となる。

９．雁屋遺跡の位置づけ

このような変遷過程をとる雁屋遺跡は、どのような集落として位置づけられるであろうか。雁屋遺跡に人が住み始めるのは、遺跡北方約 1.5km の箇所にある讃良郡条里遺跡で、近畿地方でも初現期の弥生集落が営まれ（中尾・山根編 2009）、廃絶したのちのことである。近年の土器編年成果に照らせば（田畑 2018）、讃良郡条里遺跡と雁屋遺跡の間には小断絶を挟む可能性がある。ただし、2011-2 次調査では甕沈線三条化前の時期に遡る可能性がある遺構を検出し、周辺では遺跡の山手東方約 0.8km の四條畷小学校内遺跡でも同様の時期に遡る可能性がある石敷き遺構を検出しているため（四條畷市史編さん委員会 2016）、周辺には未発見の集落が存在する可能性を考慮すべきであろう。雁屋遺跡の人びとは、讃良郡条里遺跡からの移動を想定しておくのが現時点では妥当であろうと考える。

前期中頃に雁屋遺跡には初めて人が住み始めるが、この時期は小集団が散在している状況である。

ただし、この状況はこの時期畿内の他の多くの遺跡でもみられるとされ（森岡 2011）[2]、むしろこの地域における弥生時代前期集落の形態を逸脱しない資料が増えたといえるだろう。評価すべきは居住域を円形に区画する可能性のある溝の存在であり、今後の調査の進展によっては環濠として認識できる可能性があると考える。

その後、前期後半段階の資料は、現時点では確実なものがみられない。この時期は一時的に集団が周辺へ移動していたか、もしくは遺跡の調査が進んでおらず集落が未発見である可能性があろう。

中期になると、大阪府の 1997・98 年度調査で方形周溝墓下層から検出された中期初頭の遺構と、四條畷市 1985 年度調査の３号方形周溝墓を嚆矢に、継続的に遺跡に人が住み続ける。

中期中葉には墓域が広範囲に営まれる状況が確認でき、居住域も範囲が広くなっていることが予想される。この時期は周辺でも鎌田遺跡や中野遺跡で方形周溝墓群が営まれており、雁屋遺跡を中心に大規模な集落群を形成している可能性がある。

中期後葉は墓域が東側に、一方集落域はその北西に存在しており、2018-1 次調査で墓域と居住域を区画する溝を確認した。居住域は少なくとも東西 200mを超える規模を有しているとみられ、その東側に墓域が南北 200mほどの範囲で存在する可能性があることから、相当規模の集落であったとみられる。この時期には 1992 年度調査で大型掘立柱建物が検出されており、短期間の存在だが特殊な機能が想定される。さらに、この建物廃絶後に中期後葉でも末の一時期に隣接地が居住域から墓域に変更されている。この墓域が居住域の中に存在するのか、居住域が実は複数ありその間に墓域が存在することになるのかについては、今後の調査の進展を待ちたい。

後期には居住域が直径 300mほどの範囲に広がっているとみられ、少なくとも南側は複数の同一方向の溝により墓域と居住域とが区画されている。居住域の規模は最大となるとみられ、大規模集落として位置づけられるであろう。

以上、雁屋遺跡は前期中頃に出現し、中期中葉に規模が大きくなり、その後も後期まで規模を保ちながら継続する集落とみられる。前期における他地域での集落状況や、各時期における他地域系土器の出土、遺物の出土量、墓域や居住域の分布状況などからみて、前期から後期にわたって拠点的な機能を有した集落と言えるだろう。

10. おわりに

このように、雁屋遺跡の集落変遷について簡単にまとめてきた。周辺では高宮八丁遺跡と太秦遺跡、中垣内遺跡と鍋田川遺跡などが拠点的集落とされるが（濱田 2001）、前期から後期までほぼ同一地で拠点的な集落が営まれるのは、淀川北岸では高槻市安満遺跡や茨木市東奈良遺跡が存在する一方、淀川南岸～河内潟北岸にかけての地域では雁屋遺跡が唯一といっても過言ではない。これは、これまでの確認調査から今回河内潟の汀線予想ラインとともに遺跡変遷を示したが、河内潟岸にあって西方地域との交流を行う上で都合の良い立地であったこととかかわりがあるのではなかろうか。

今回、雁屋遺跡の集落変遷を現時点の資料から考察したが、いまだ遺跡全体の状況を細かく考察するには資料が不足している。このため、資料の存在しないものは推測で埋めた部分があり、問題を残したといえる。この点については、今後の調査の蓄積により再検討していきたい。いずれにせよ、雁屋遺跡の調査全体を俯瞰し、集落変遷について検討するという、当初の目的は達することができた。今後も調査研究を継続し、雁屋遺跡の変遷についてさらに明らかにしていきたい。

（實盛）

註

１）これらの溝群が環壕としての機能を有する可能性は、山田隆一がすでに指摘している（山田 2002）。

２）森岡秀人氏から、出土土器検討の際に直接教示を得た。

挿図出典

第 71 図～第 75 図は、各調査報告書掲載図等を用い筆者が作成した。